馬地獄

織田作之助

東より順に大江橋（おおえばし）、渡辺橋（わたなべばし）、田簔橋（たみのばし）、そして船玉江橋まで来ると、橋の感じがにわかに見すぼらしい。橋のたもとに、ずり落ちたような感じに薄汚（うすぎたな）い大衆喫茶店（きっさてん）兼飯屋（めしや）がある。その地下室はもとどこかの事務所らしかったが、久しく人の姿を見うけない。それが妙（みょう）に陰気（いんき）くさいのだ。また、大学病院の建物も橋のたもとの附属（ふぞく）建築物だけは、置き忘れられたようにうら淋（さび）しい。薄汚（うすよご）れている。入口の階段に患者（かんじゃ）が灰色にうずくまったりしている。そんなことが一層この橋の感じをしょんぼりさせているのだろう。川口界隈（かわぐちかいわい）の煤煙（ばいえん）にくすんだ空の色が、重くこの橋の上に垂れてい

る。川の水も濁（にご）っている。

ともかく、陰気だ。ひとつには、この橋を年中日に何度となく渡らねばならぬことが、さように感じさせるのだろう。橋の近くにある倉庫会社に勤めていて、朝夕の出退時間はむろん、仕事が外交ゆえ、何度も会社と訪問先の間を往復する。その都度せかせかとこの橋を渡らねばならなかった。近頃（ちかごろ）は、弓形になった橋の傾斜（けいしゃ）が苦痛でならない。疲（つか）れているのだ。一つ会社に十何年間かこつこつと勤め、しかも地位があがらず、依然（いぜん）として平社員のままでいる人にあり勝ちな疲労（ひろう）がしばしばだった。橋の上を通る男女や荷馬車を、浮（う）かか

ぬ顔して見ているのだ。

近くに倉庫の多いせいか、実によく荷馬車が通る。たいていは馬の肢(あし)が折れるかと思うくらい、重い荷を積んでいるのだが、傾斜があるゆえ、馬にはこの橋が鬼門(きもん)なのだ。鞭(むち)でたたかれながら弾(はず)みをつけて渡り切ろうとしても、中程に来ると、轍(わだち)が空まわりする。馬はずるずる後退しそうになる。石畳(いしだたみ)の上に爪立(つまだ)てた蹄(ひづめ)のうらがきらりと光って、口の泡(あわ)が白い。瘦(や)せた肩(かた)に湯気(ゆげ)が立つ。ピシ、ピシと敲(たた)かれ、悲鳴をあげ、空を嚙(か)みながら、やっと渡ることができる。それまでの苦労は実に大変だ。彼(かれ)は見ていて胸が痛む。轍の音

がしばらく耳を離(はな)れないのだ。
雨降りや雨上りの時は、蹄がすべる。いきなり、四つ肢をばたばたさせる。おむつをきらう赤(あか)ん坊(ぼう)のようだ。仲仕が鞭でしばく。起きあがろうとする馬のもがきはいたましい。毛並(けなみ)に疲労の色が濃(こ)い。そんな光景を立ち去らずにあくまで見て胸を痛めているのは、彼には近頃自虐(じぎゃく)めいた習慣になっていた。惻隠(そくいん)の情もじかに胸に落ちこむのだ。以前はちらと見て、通り過ぎていた。
ある日、そんな風にやっとの努力で渡って行った轍の音をききながら、ほっとして欄干(らんかん)をはなれようとす

ると、一人(ひとり)の男が寄ってきた。貧乏(びんぼう)たらしく薄汚い。哀(あわ)れな声で、針中野(はりなかの)まで行くにはどう行けばよいのかと、紀州訛(きしゅうなまり)できいた。渡辺橋から市電で阿倍野(あべの)まで行き、そこから大鉄電車で――と説明しかけると、いや、歩いて行くつもりだと言う。そら、君、無茶だよ。だって、ここから針中野まで何里……あるかもわからぬ遠さにあきれていると、実は、私は和歌山の者ですが、知人を頼(たよ)って西宮まで訪ねて行きましたところ、針中野というところへ移転したとかで、西宮までの電車賃はありましたが、あと一文もなく、朝から何も食べず、空腹をかかえて西宮からやっとここまで歩いて

やって来ました、あと何里ぐらいありますか。半分泣き声だった。

思わず、君、失礼だけれどこれを電車賃にしたまえと、よれよれの五十銭銭（ぜに）を男の手に握（にぎ）らせた。けっしてそれはあり余る金ではなかったが、惻隠の情はまだ温く尾（お）をひいていたのだ。男はぺこぺこ頭を下げ、立ち去った。すりきれた草履（ぞうり）の足音もない哀れな後姿だった。

それから三日経（た）った夕方、れいのように欄干に凭（もた）れて、汚い川水をながめていると、うしろから声をかけられた。もし、もし、ちょっとお伺（うかが）いしますがのし、

針中野ちうたらここから……振り向いて、あっ、君はこの間の——男は足音高く逃げて行った。その方向から荷馬車が来た。馬がいなないた。彼はもうその男のことを忘れ、びっくりしたような苦痛の表情を馬の顔に見ていた。

（昭和十六年十二月）

底本：「ちくま日本文学全集　織田作之助」筑摩書房
１９９３（平成５）年５月20日第１刷発行
入力：吉田稔彦
校正：今井忠夫
２００４年１月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。